

# 試訳: アウシュヴィッツのガス室についての目撃証人

ロベール・フォーリソン

歴史的修正主義研究会試訳

最終修正日: 2006年8月07日

本試訳は当研究会が、研究目的で、Robert Faurisson, *Witnesses to the Gas Chambers of Auschwitz, Gauss, Ernst, Dissecting the Holocaust. The Growing Critique of 'Truth' and 'memory'*, (Ed.), Theses & Dissertations Press, Capshaw, AL, 2000 を試訳したものである。ただし、試訳したのは、下記のオンラインの増補・改訂版である。

誤訳、意訳、脱落、主旨の取り違えなどもあると思われるので、かならず、原文を参照していただきたい。

online: <http://vho.org/GB/Books/dth/fndwitness.html>

[歴史的修正主義研究会による解題]

これまでホロコースト正史の多くは、物的証拠、法医学的証拠、化学的証拠にではなく、もっぱら目撃証言にもとづいて描かれてきた。しかし、ホロコーストの「目撃証人」は、その証言内容がきわめて非合理的、非科学的であろうとも、戦後から1985年まで、物的証拠、法医学的証拠、化学的証拠に照らし合わせて、反対尋問を受けることはなかった。1985年のツンデル裁判で、「目撃証人」ははじめてこうした反対尋問にさらされたのであるが、その、反対尋問を準備したフォーリソンが、アウシュヴィッツのガス室のついで目撃証人を検証する。論集『ホロコーストの解剖』の論文。

---

## 1. 概要

目撃証言はつねに検証しなくてはならない。犯罪事件では、このような証言を検証する手段としては、証言を物的証拠(とりわけ、凶器に関する専門知識)と対比すること、目撃内容について証人に詳しく反対尋問することの二つの本質的な手段がある。しかし、アウシュヴィッツの殺人ガス室が問題となった公判では、判事も弁護士も凶器に関する専門的知識をまったく要求することもできなかった。さらに、証人に反対尋問をして、この化学的屠殺場のひとつについての詳細を証言するように求めた法律家もいなかった。このような事態は1985年まで続いた。この年に、トロントで開かれた最初

のツンデル裁判のとき、証人たちがついにこのテーマについて反対尋問を受け、彼らは完敗を喫したのである。ユダヤ絶滅説の擁護者は、この裁判での失敗や1985年以前や以降の失敗に直面して、証言にもとづいたアウシュヴィッツの歴史を放棄し始め、今日では、実態調査と証拠にもとづいた、科学的土台、少なくとも科学的と見えるような土台に立脚せざるをえなくなっている。エリー・ヴィーゼルやクロード・ランズマンのようなアウシュヴィッツの「証言史」は信用を失っている。その時代は終わったのである。絶滅論者に残されているのは、修正主義者と同じように事実と証拠にもとづいて研究する道だけである。

本小論では、「ガス室」とは殺人ガス室、あるいは「ナチスのガス室」をさす。「アウシュヴィッツ」とは、アウシュヴィッツ I もしくはアウシュヴィッツ中央収容所、アウシュヴィッツ II もしくはビルケナウをさす。さらに、「ガス室証人」とは、上記の場所での殺人ガス処刑に関与したと主張している人々、および殺人ガス室を目撃したと証言している人々をさしている。そして、「証人」とは、裁判での証人であろうと、メディアでの証人であろうと、通常に理解されているところの証人をさす。裁判での証人は、公判の証人席で、宣誓のもとで証言し、メディアでの証人は、本や雑誌論文、映画、テレビ、ラジオで証言する。裁判での証人とメディアでの証人という二つの役割を交互に果たす証人もいる。

アウシュヴィッツのガス室については、心理学的、社会学的考察もあり、また、物理的、化学的、毒物学的、文書資料的、歴史的観点からの考察——それによるとこれらの証言は受け入れがたい——もあるが、本小論はこうした考察を行なうものではない。その目的はもっぱら、修正主義者がほとんど触れてこなかったけれども、非常に重要な点を明らかにすることである。1985年まで、証言されている事実の資料的性質について、法廷で反対尋問を受けたガス室証人は一人もいなかった。1985年トロントで開かれた最初のツンデル裁判で、私はこのような証人を反対尋問のもとにさらすことができたが、そのとき彼らは崩れ落ちてしまった。そのとき以来、ガス室証人が出廷したことはない。唯一の例外は、イスラエルでのデムヤンユク裁判であるが、ここでも彼らの証言が偽証であることが明らかにされた。<sup>1</sup>

手始めに、少々わき道にそれてしまうが、1983年以降、シモーヌ・ヴェイユ<sup>2</sup>が、ガス室証人は存在しないことを認めざるを得なくなった理由について触れておこう。

## 2. シモーヌ・ヴェイユの説

終戦以来、多くの人々が、アウシュヴィッツのガス室の目撃者が無数に存在するという幻想を次第に受け入れていった。1970年代末、とくにフランスのメディアに歴史的修正主義が登場すると、そのような証人は一般に信じられているほど多くないと考え

始める人々が登場した。このため、1980年代初頭に、ユダヤ人組織が私を告発し、裁判を準備するにあたって、彼らの法律家たち、とくに将来の司法大臣ロベール・バディナーは証拠と証人を探し出すのに非常に難儀した。彼らは、フランスでは発見できなかったものをポーランドやイスラエルで発見しようと、スタッフをともなって巡礼団のように両国を訪問した。しかし、すべては無駄であった。

私に対する最初の裁判は1981年に開かれ、1983年には控訴審が開かれた。一人の証人も出廷というリスクを冒そうとしなかった。1983年4月26日、パリ控訴裁判所は判決文を手渡した。当然にも、予想通り、私は「他者に対する中傷」の咎で有罪であった。大新聞に掲載された私の論文がユダヤ人を中傷したというのである。しかし、裁判所は、私の論敵を驚愕させてしまうような注釈を判決文に付した。私の研究を誠実ではあるが危険であると判断したのである。判事の見解によると、私は他人が私の発見を非難すべき目的のために利用してしまうのを許してしまうがゆえに、危険であるというのであった。私の論敵は、私が「歴史を偽造することで他者を中傷している」と非難していたのであるが、それとは逆に、裁判所の見解では、私の研究は、怠慢、軽薄さ、意図的な無知、嘘などを発見し得ないという意味で、誠実であるというのであった。

裁判所は、証言問題については、次のようにまで述べている。

「フォーリソン氏の研究は、さまざまな証言を信じるとすれば、第二次大戦中に、ドイツ当局が移送した人々を組織的に殺害するために使われたとされるガス室の实在性について扱っている。」(強調——筆者)

裁判所は、私の「論理的筋道」と「私の理由付け」を次のように完璧にまとめている。

「…1945年以來叙述されているようなかたちでのガス室の实在性は、今日までのすべての証言を無効にするか、少なくとも、それに疑いを投げかけるような絶対的不可能性と矛盾している。」(強調——筆者)

最後に、裁判所は、このような考察から実際的な結論を導きながら、ガス室の証拠と証言を信じない権利をすべてのフランス人に保証している。

「それゆえ、[ガス室問題に関する]フォーリソン氏の擁護する結論の価値は専門家、歴史家、世論の評価のみにかかっている。」

二週間後、シモーヌ・ヴェイユは、自分と自分の同宗派の人々を驚愕させた裁判所の裁定に反応して、非常に重要な声明を発表した。彼女は、ガス室についての証拠、

痕跡、ひいては証人が存在しないことを認めたが、存在しないことについては簡単に説明しようと主張した。

「ナチスがこれらのガス室を破壊し、組織的に証人すべてを消し去ったことは誰もが知っている。」

まずはじめに、「誰もが知っている」という表現は、法律家がすべき議論ではない。さらに、シモーヌ・ヴェイユは、おそらく危険な状況から抜け出せると信じていたのであるが、事態を悪くしてしまっただけになった。すなわち、自分の説を補強するために、ガス室の実在性を証明するだけでなく、「ナチス」がそれらを破壊したこと、すべての証人を消し去ったことを証明しなくてはならなくなった。ドイツ人は、いったいどのようなやり方で、何時、誰と、どのような手段を使って、まったく秘密裏にこのような膨大な犯罪を実行したのであろうか。

しかし、そのようなことはどうでもよい。ヴェイユが「ガス室についての証拠、痕跡、証人が存在しない」ことを認めた点に留意しておこう。ヴェイユは自分の仲間を安心させようとして、この驚くべき譲歩を常套文句で締めくくった。*France-Soir Magazine* (May 7, 1983, p. 47)のインタビュー記事「ヒトラーの日記についてのシモーヌ・ヴェイユの警告：私たちは虐殺を陳腐化してしまうという危険を冒している」のなかに、彼女自身の次のような一節がある。

「今日、私を驚かせているのは次のようなパラドックスである。誰かが、信憑性を慎重に検証せずに、評判と大金に力を借りてヒトラーのものとされる日記を公表している一方で、これと同時に、ガス室の実在を否定するフォーリソンに対する裁判では、原告側はガス室の実在についての正式な証拠を提出するように義務づけられているというパラドックスである。しかし、ナチスがこれらのガス室を破壊し、組織的に証人すべてを消し去ったことは誰もが知っている。」

ヴェイユがこのような姿勢をとるようになってしまったのは、1983年4月26日の災難によるだけでなく、彼女にとって、1982年という年をガス室の歴史と証人の信憑性にとって暗黒の年としてしまった一連の事件によっている。そのうちの3つをあげておこう。

1. 1982年4月21日、歴史家、政治家、旧移送者はガス室の実在と作動の証拠を研究するために、パリに協会を設立した(ASSAG: 民族社会主義者体制の下でのガス処刑研究協会)。しかし、1年たっても、まったく証拠を発見できて

いない。[協会の設立条文には、「その目的を達成するまで存続する」とあるので、その存続自体が、証拠を発見できていない証であろう]。

2. 1982年5月、ベテラン兵士事業省はパリで注目すべき「移送展示会、1933-1945年」を開催した。この展示会はフランス各地を巡回する予定であった。私はすぐに、この展示会の間違った性格を示す文章を送った。「ナチのガス室」の存在を示す証拠、正確な証言は、偽りの証拠以外には、まったく訪問者に展示されていなかったからである。事業省によるこの企画の責任者であったヤコブ氏は、途方もない代物になってしまいそうな展示会をすぐにキャンセルする措置をとった。
3. 1982年6月29日から7月2日、ソルボンヌで「ナチス・ドイツのユダヤ人の絶滅」と題する国際シンポジウムが開かれた。この会議は、フランスで強まりつつあった修正主義者の攻勢に決定的な反撃を加えるものとされていた。シンポジウムは華々しい記者会見で終了すると考えられていたが、実際にはまったく違った。会議初日、私たちは私の論文「ヴィダル・ナケへの回答」<sup>3</sup>のコピーをソルボンヌの入り口ホールで配った。会議は非公開で、騒々しい雰囲気の中で行なわれた。最後に、記者会見では、二人のシンポジウム組織者、歴史家のフランソア・フレとレイモン・アロンは、「ガス室」という単語を口に出しもしなかった。

再三強調してきたが、この1982年7月2日という日は、「ナチスのガス室」神話とそれに関与した証人が、少なくとも歴史研究のレベルでは、死んでしまったか、最後の死の苦悶をむかえた日であった。ソルボンヌの心臓部で、人々は困惑しながらも、確固とした証拠、信用に値する証言がまったくないことを発見したのである。にもかかわらず、この会議は大量の証拠と証言を提出することで、「フォーリソンの愚行」に終止符を打ったと声高に語った。ファンファーレがけたたましいほど、その後には沈黙が続くものである。

### 3. ファインジルベルク-ヤンコフスキの文書証言

前述したように、私の裁判では、あえて出廷しようとした証人は一人もいなかった。最後の最後に、検事側はパリ在住のユダヤ人の文書証言を提出してきた。しかし、意図的に出廷させなかった。このユダヤ人は、1911年10月23日、ポーランドのストッククで生まれた有名なアルター・シュムル・ファインジルベルクである。彼はポーランド人の給仕であり、無神論的ユダヤ人であり、スペインでは国際旅団の共産主義政治代表であったが、アウシュヴィッツ・ビルケナウに3年間投獄されていた。

彼は、短い文書証言のなかで、アウシュヴィッツの焼却棟(旧焼却棟あるいは焼却

棟 I) で働いていたとき、石炭室で同僚だけで多くの時間をすごしたと述べている。SS が隣の部屋でユダヤ人をガス処刑しているときには、SS は、何と、ユダヤ人にガス処刑作業を目撃させないように、石炭室に特別労務班を隔離しておくという用心深い措置をとったからであるというのである。ガス処刑が完了すると、ドイツ人は特別労務班員を解放して、犠牲者を集めさせ、焼却させたという。だとすれば、ドイツ人は犯罪現場を隠しながらも、その結末だけは明らかにしていたことになる。

この証人は、アルター・ファインジルバー、スタニスタフ・ヤンコフスキ、カスコヴィアクという名前でも知られている。彼の証言は、『アウシュヴィッツ日記』<sup>4</sup>でも読むことができる

#### 4. 最初のツンデル裁判(1985年)での証人の検証

1983年4月26日に修正主義はフランスで勝利を収めたが、この重大な勝利は、1985年にトロントでのツンデル裁判で確固としたものとなった。人々の見解、とくにアウシュヴィッツのガス室に関する見解に衝撃を与えたことを強調しておくためにも、この裁判について詳しく述べておきたい。すなわち、戦後初めて、ユダヤ人証人が通常の反対尋問にさらされたからである。さらに、二回目のツンデル裁判(1988年)の重要性を過小評価するつもりはないが、1985年の裁判には、1988年の裁判の成果の種がすべて含まれていた。すなわち、『ロイヒター報告』とその影響のなかでその成果を豊かなものとしたすべての科学的報告が含まれていたのである。

1985年の裁判でも、1988年の裁判でも、私はエルンスト・ツンデルと彼の弁護士ダグラス・クリスティの助言者であった。すべてのユダヤ人証人がはじめて、報告された事実の物的性質にもとづいて、仮借なく反対尋問にさらされるという条件でのみ、この重責を引き受けた。すでに指摘したように、1945年から1985年まで、ユダヤ人証人には事実上の免責特権が与えられていた。ガス室の物的説明(正確な配置、物理的概観、規模、内部構造、外部構造)と殺人ガス処刑の物的説明(最初から最後まで作業手順、使用器具、作業前と作業中の処刑人の注意措置)を検討したり、証人に尋問した弁護士は誰もいなかった。

テシュ、ドロシーン、ヴァインバッヒャーに対する裁判5のような例外的なケースでのみ、弁護士が物的な性格を持つ尋問をしていたが、それは証人を困らせるようなものではなく、尋問すべき本質的な問題の周辺に位置するものであった。見たこともない凶器の検証を要求した弁護士は一人もおらず、それを見せてくれと要求した弁護士も一人もいなかった。1945-1946年のニュルンベルク裁判では、ドイツ人弁護士はこの点についてはまったく要求しようとしなかった。1961年のイェルサレムでのアイヒマン裁判では、弁護士ロベルト・セルヴァティウス博士はこの問題を取り上げようとしなかった。彼は、1971年6月21日の私あての書簡のなかで、「アイヒマン自身はガス室を

目撃していない。この問題は議論されなかった。しかし、彼はその実在については問題としなかった」と書いている。6

1963－1965年のフランクフルト裁判では、弁護側はひどく臆病であった。たしかに、裁判周囲の雰囲気は弁護側と被告には不利であった。この見世物裁判は、当初は最高裁判所長官、当時は上院議長であったハンス・ホムマイア一人に対してと同様に、ドイツの司法制度の名誉に対しても汚点であろう。180回以上の公判のなかで、判事と陪審員、検事と原告、被告と弁護人、ならびに世界中からやってきていたジャーナリストも、たんなる収容所の図面、ビルケナウ収容所の図面——5つの小さな幾何学的数字が、殺人ガス室とされている施設の場所に記されているだけであり、アウシュヴィッツには「旧焼却棟」、ビルケナウには「焼却棟Ⅱ」、「焼却棟Ⅲ」、「焼却棟Ⅳ」、「焼却棟Ⅴ」という単語が記されている——を「凶器」を物理的に完璧に提示したものと認めた。これらの図面7が法廷で展示された。

修正主義者はこのフランクフルト裁判を1450－1650年代の魔女裁判になぞらえてきた。だが、この魔女裁判でさえも、魔女による黒ミサの様子を描こうとした人物は存在した。フランクフルト裁判では、フィリップ・ミュラーのような証人には問題があると考えていた弁護士でさえも誰一人として、ユダヤ人証人や自白したドイツ人被告に対して、実際に目撃したことを詳細に証言するように求めなかった。裁判団はドイツ人弁護人も含めてアウシュヴィッツの犯罪現場を2回視察したが、ドイツ人弁護人は凶器についての技術的説明、犯罪学的な専門報告を求めなかったようである。それどころか、フランクフルトの弁護士アントン・ライナーは、SS隊員がチクロンBの丸薬をいわゆるアウシュヴィッツのガス室に投げ込んだとされるシューターのふたを自分が持ち上げている写真を新聞記者にとらせることで満足してしまった。

だから1985年のトロント裁判では、私はこのような変則的な事態と決別して、タブーを破り、弁護人ダグラス・クリスティに、犯罪が行なわれたのか否か、もし行なわれたとすれば、誰によって、何時どのように行なわれたのかを確定するという、すべての裁判ではごく当然の質問を、専門家やユダヤ人証人に対して行なわせようとした。

幸いなことに、エルンスト・ツンデルは私の条件を受け入れ、ダグラス・クリスティは、この戦術を採用して、私が事前に準備した質問を専門家と証人に対して行なうことに賛同した。こうすることで、すべてが変わり、多くの偽証が作り上げてきたヴェールを引き裂くことができると確信していた。私はツンデルが無罪となるとは期待していなかったし、私たちは、この大胆な行動の代償を支払う準備をしていた。しかし、この洞察力ある人物の助けを借りて、また、この勇敢な弁護士の尽力のおかげで、裁判ではないとしても、歴史がこの人物に歴史的な名声を与えることを希望していた。

最初の反対尋問のときから、検事側のあいだにはパニックが起こり始めた。毎晩、夜を徹して、私は質問を用意した。そして、これらの質問に必要な資料をつけて、弁護人ダグラス・クリスティに渡した。クリスティはクリスティで、女性の協力者の助けを借り

て、尋問の法的な側面を調整した。私は反対尋問が行なわれているあいだ、弁護士席のそばに陣取り、専門家や証人の回答に対応して、補足的質問、その場の質問を黄色いノートの上に、つねに用意していた。

検事側が召喚した専門家は、『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』の著者ラウル・ヒルバーグ博士であった。彼は、毎日毎日屈辱を味わい、1988年に新しい検事から新しいツンデル裁判のために招請されると、証人となるのを拒否してしまった。内々の手紙のなかで、彼は、ダグラス・クリスティの尋問にふたたび直面することになる恐れが拒否の理由であると説明している。ヒルバーグ博士に対する反対尋問によって、ユダヤ人の物理的絶滅についての命令、計画、指示、予算の現物を誰も持っていないことがまったく明らかとなった。さらに、(ガス室であれガス貨車であれ)凶器に関する報告書、毒ガスによる囚人の殺戮を示す検死報告もまったくないことが明らかとなった。凶器や犠牲者に関する証拠がなかったとすれば、犯罪に関する証人が存在したといえるのであろうか。

証言はたえず検証されなくてはならない。検証するにあたって、まず最初に行なわなくてはならないことは、証人の証言と犯罪の物的性質に関する調査結果や専門家の意見と比べてみることである。だが、いわゆるアウシュヴィッツのガス室に関しての調査報告も、専門家報告も存在しなかった。だから、反対尋問が困難となっていた。しかし、これを口実とすべきではない。反対尋問を行わなければ、証人が真実を述べているのかどうか知るすべがないがゆえに、ますます反対尋問は不可欠なのである。

## 5. ついに反対尋問を受けたユダヤ人証人:アーノルド・フリードマンとル

### ドルフ・ヴルバ博士

私たちは技術的文書的手段を使って、二人の主要なユダヤ人証人アーノルド・フリードマンとルドルフ・ヴルバ博士に厳しい反対尋問を行なったが、これに関心のある人々に対しては、裁判記録8を読むことをおすすめする。304-371頁はアーノルド・フリードマンへの尋問と反対尋問をカバーしている。フリードマンは、445-446頁で、事実上自分は何も目撃していないこと、説得力のある人物に出会ったので、伝聞から証言したことを認めている。またなんと、もしも、クリスティ氏が、今自分に話していることを、そのときにさかのぼって話すことができるとしたら、これらの第三者の立場ではなく、クリスティ氏の立場を取るであろうとも付け加えている。

ヴルバ博士は非常に重要な証人であった。トロント裁判では、検事側は「ホロコースト」の専門家や証人を募っていたが、専門家のナンバー・ワンがヒルバーグ博士であり、証人のナンバー・ワンがヴルバ博士であるといえるであろう。ヴルバの証言は、



1944年11月にルーズベルト大統領執務局が発行した、有名な「ドイツの絶滅収容所  
アウシュヴィッツとビルケナウに関する戦争難民局報告」の情報源の一つであった。  
ヴルバ博士はアラン・ベスティックとの共著『私は許すことができない』9の著者でもあ  
り、後者は序文の中でヴルバ博士についてこう述べている。

「彼は非常に苦勞して本書の細部を執筆した。この点で、私は彼に多くを  
負っているといわなくてはならない。非常に入念な、こだわりすぎともいえ  
る本書の執筆にあたって、彼は正確さを追及した。」(2頁)

おそらく、裁判所は、アウシュヴィッツのガス室についてこれほど正確に証言できる  
証人は存在しないと考えていたことであろう。しかし、反対尋問の終わるころには、事  
態は逆となり、ヴルバ博士は、自分のあやまちや嘘について釈明するのに終始する  
ことになった。彼は、自著のなかでは、「詩的な放埒さ」、彼がラテン語で表現するこ  
ろでは *licentia poetarum* に頼ったと自白した。

結局、ちょっとしたドラマが繰り広げられた。この証人ナンバー・ワンを召喚した検事  
グリフィスが、今度はヴルバの嘘に腹を立てて、次のような質問を浴びせかけた。

「あなたの本『私は許すことができない』についての議論のなかで、この  
本を書くにあたって詩的放埒さを使ったと何回もクリスティ氏におっしゃい  
ましたね。証言でもこの詩的放埒さを使ったのですか。」(1636頁)

偽証した証人は攻撃をかわそうとしたが、検事グリフィスは、今度はヴルバによるガ  
ス処刑された犠牲者の数について、やはり検事の立場を離れた第二の質問を行なっ  
た。ヴルバは多弁を勞して無意味な回答を行なった。グリフィスは第三の最後の質問  
をしようとしたが、ここで、ドラマは突然中断し、グリフィスは判事にこう述べた。

「これ以上、ヴルバ博士には質問はありません。」(1643頁)

ヴルバ博士はうなだれながら、証人席を去った。彼に対する最初の尋問、反対尋問、  
最終尋問は裁判記録では400頁(1244-1643頁)にわたる。この箇所は、偽証の検  
証についての法律学百科事典の項目として利用できるであろう。

## 6. 検事側は証人の召喚を放棄

3年後の1988年、第二のツンデル裁判のときには、検事側は証人の召喚を放棄す  
るのが賢明であると考えた。カナダの裁判所は最初の裁判の教訓を理解していた。

「ナチスのガス室」の存在と作動に関する信頼できる証人は一人もいなかったからである。

次第に、各国も同じ教訓を学んでいった。1987年、フランスでのクラウス・バルビー裁判では、アウシュヴィッツのガス室についての話が登場したが、適切なガス室証言をすることができる証人を召喚した人はいなかった。10 弁護士ジャック・ヴェルゲは勇敢ではあったが、無鉄砲ではなかったため、この話題を避けようとした。ユダヤ人法律家は私がヴェルゲの側に立って出廷することを恐れていたため、ヴェルゲの選択は幸運であった。もしも、ヴェルゲ氏が助言を申し出た私の提案を受け入れていたとすれば、私たちはフランスで、ガス室神話に対して深刻な打撃を与えることができたであろう。

フランスでは修正主義者に対する裁判がいくつか開かれており、ユダヤ人証人がガス室の話をしたこともあるが、ガス室を目撃したとか、殺人ガス処刑に関与して、「ガス室」から死体を引き出したとか、法廷で証言した人物は一人もいない。

今日では、ガス室証人はひどく少なくなっている。イスラエルでのデムヤンユク裁判では、非常に多くの偽証がこの問題に絡んでいることが再度明らかとなり、疑惑がますます深まった。数年前、老いたユダヤ人が法廷の後ろの席で私に詰問し、自分たちが「アウシュヴィッツのガス室の生き証人」だとして、刺青を見せてくれたことがあった。私が、自分の眼で見たことを尋ね、ガス室について話してくれるように頼むと、彼らは次のように反論した。

「どうしてそのようなことができるというのですか。もし自分の目でガス室を見ていたとすれば、今日ここであなたに話しかけていないでしょう。私自身もガス処刑されていたことでしょう。」

結果として、シモーヌ・ヴェイユと1983年5月7日の声明に引き戻されることになる。これについてどう考えるべきかについてはもうわかっている。

## 7. メディア証人

裁判での証人とは別に、アウシュヴィッツやビルケナウでのガス室、殺人ガス処刑についてのメディアの証人がいる。少し考えただけでも、オルガ・レンギエル、ジゼラ・パール、ファニア・フェネロン、オタ・クラウス、エーリヒ・クルカ、ヘルマン・ラングバイン、アンドレ・レティチ、サムエル・ピサル、モーリス・ベンルビ、アンドレ・ロジェリエ、ロベール・クラリー…である。私の蔵書は、何回も複製された彼らの証言でいっぱいである。これらの証言が虚偽であることをはじめて明らかにしたのはポール・ラッシニエであった。彼はこの件を、『本当のアウシュヴィッツ裁判、救いがたい勝利者たち』で

扱った。その付録 V はミクロス・ニーシュリという『アウシュヴィッツの医師』にあてられている。11

1950 年代から 1980 年代にかけて、修正主義者たちは証言の批判的な研究に従事することが役に立つと考えていた。今では、この方法はもはや十分すぎるほどになっているようである。救急車を追跡するようなことはやめて、副次的文献を批判する配慮を絶滅論者、とくにプレサックを批判することに向けよう。1991 年 10 月、「移送者、囚人、失踪者の家族協会国民連合」の機関紙である定期刊行物『自由のための移送』のカバー・ページには次のようにある。

「本号には、特別労務班からの珍しい逃亡者アンリ・ビリーの証言の一部が掲載されている。」

1991 年の 11 月号ではビリー氏は、「私の驚くべき物語」との題でアウシュヴィッツでの体験談を続けている。

だが、1991 年 12 月と 1992 年 1 月の『自由のための移送』の分号には、「本誌コラムへのアンリ・ビリーのテキスト挿入に関する説明」という記事が登場している。刊行物の発行者・編集者は、嘘を発見したのである。すなわち、ビリー氏はその証言の大半において、

「1946 年に René Julliard 出版社が翻訳・刊行したミクロス・ニーシュリ博士の『アウシュヴィッツの医師』の文章を、出典を明らかにせずに、一語一語剽窃している(とくに 7 章と 28 章)。不幸なことに、ニーシュリ博士の犯したあやまちがそのまま繰り返されている。剽窃が広く行なわれている箇所は、アンリ・ビリーが働いていた[と詐称している]アウシュヴィッツ・ビルケナウの特別労務班の職務の記述である。…こうした分析の結果、アンリ・ビリーのテキストをオリジナルな個人的証言とみなすことはできない。」

「不幸なことに、ニーシュリ博士の犯したあやまちがそのまま繰り返されている」という文章を注意深く読んだ読者であれば、ユダヤ人貿易商のビリー氏は、すでに虚偽であるとわかっている証言をコピーしたのではないかと考えることであろう。サルトルは 1951 年に『アウシュヴィッツの医師』の一部を『ル・タン・モデルネ』に掲載しているが、私が最近指摘しておいたように、ラッシニエはかなり昔に、この作品がまったくの詐欺であることを証明していた。その後、多くの修正主義者、とくにマッソーニョがこの説を確証している。12 また、私はプレサックの著作『アウシュヴィッツ:ガス室の技術と作動』13への書評のなかで、「プレサックによるニーシュリの喜劇のいやいやながらの上演」という章を入れておいた。薬剤師プレサックは、迂回的手段、骨の折れる発明、気

まぐれな憶測という手段を使って虚偽の証言を何とか擁護しようとしたが、結局は、案に反して、それらすべての信用を落としてしまうことになった。アウシュヴィッツでの虚偽の証言に関心のある人々は、この章を参照していただきたい。14

## 8. 偽証者エリー・ヴィーゼルとプリモ・レヴィ

エリー・ヴィーゼルとプリモ・レヴィについては、いくつかの言葉が私たちの関心を引きく。

ヴィーゼルについては、「著名な偽証者：エリー・ヴィーゼル」という論文<sup>15</sup>で明らかにしておいた。ヴィーゼル氏は、アウシュヴィッツとブッヘンヴァルトでの収容生活を描いた自伝的作品『夜』<sup>16</sup>のなかでは、ガス室には触れてもいないが、マス・メディアの報道のおかげで、「ホロコースト」とガス室についての証人とみなされるようになっている。彼によると、ドイツ人がユダヤ人を大量殺戮したとすれば、なんと、彼らを燃え盛る火のなかや焼却炉に押し込むことによってであった。彼の証言の結論(123-133頁)には非常に奇妙なエピソードがある。すなわち、1945年1月、ドイツ人は彼と彼の父親に、収容所に残ってソ連軍の到着を待つか、ドイツ人と一緒に撤退するかの選択を迫った。相談した結果、父と子は、その場にとどまってソ連の解放軍を待つかわりに、処刑人とともにドイツのほうに向かうことを決心したというのである。私は、この件についての説明をヴィーゼル氏に求めて、何年も待っている。<sup>17</sup>

奇妙なことであるが、ここ何年かのあいだに、メディアはプリモ・レヴィをアウシュヴィッツのガス室の証人のなかの最重要人物にまつりあげた。彼は『これが人間であるならば』<sup>18</sup>の著者である。第一部がもっとも長く、もっとも重要である。<sup>19</sup> 頁では、ビルケナウでのガス処刑のことを知ったのは戦後であったこと、彼自身はブナ・モノヴィツで働いており、ビルケナウには足を踏み入れたこともなかったことを語っている。そして、非常にあいまいなかたちで、単数のガス室に6回触れており(19、48、51、96、135、138頁)、複数のガス室については1回触れている。彼は、ガス室については、単数形で述べており、しかも、「誰もが話している」というように噂として触れているだけである(51頁)。30年ほどのちの1976年に書かれた「補足」の中に、突然、ガス室という項目が出現する。26頁(189-214頁)——コンパクトな書式となっているので30頁ほどである——のスペースのなかで、11回触れている(193頁に2回、198頁に3回、199頁に1回、201頁に2回、202頁、209頁、210頁に1回)。うち2回は、「ガス」について、9回は、「ガス室」(いつも複数形)についてである。彼は自分が目撃したかのように書いている。

「ガス室は、鉛管、蛇口、脱衣室、衣服のフック、ベンチなどを備えたシャワー室のようにカモフラージュされていた。」(198頁)

さらに大胆にも、次のように付け加えている。

「ガス室と焼却炉は数百万単位で人命と死体を処分するために、意図的に考え出された。この恐ろしい記録はアウシュヴィッツに関してであり、1944年8月だけで、1日24000名が死亡した。」(201-202頁)

エリー・ヴィーゼルとプリモ・レヴィだけが、このように自分の記憶を「膨らませた」だけではない。

プリモ・レヴィは化学技師だった。『これが人間であるならば』には科学的観点から見ると錯乱としかいえない要素があるが、それについては、ピエール・マラスの『シヨアの宣伝作家、プリモ・レヴィ、ジョルジュ・ヴェレール、ジャン・クロード・プレサックを精読する』<sup>19</sup>を参照すべきである。とくに、プリモ・レヴィに関する「化学者、トラック・バッテリー、ガス室」の章(7-21頁)を参照。レヴィは1987年4月11日に死んだ(自殺と伝えられている)。1943年12月13日、彼が24歳のときにファシストの民兵によって射殺されなかったのは、ユダヤ人であったためであった。

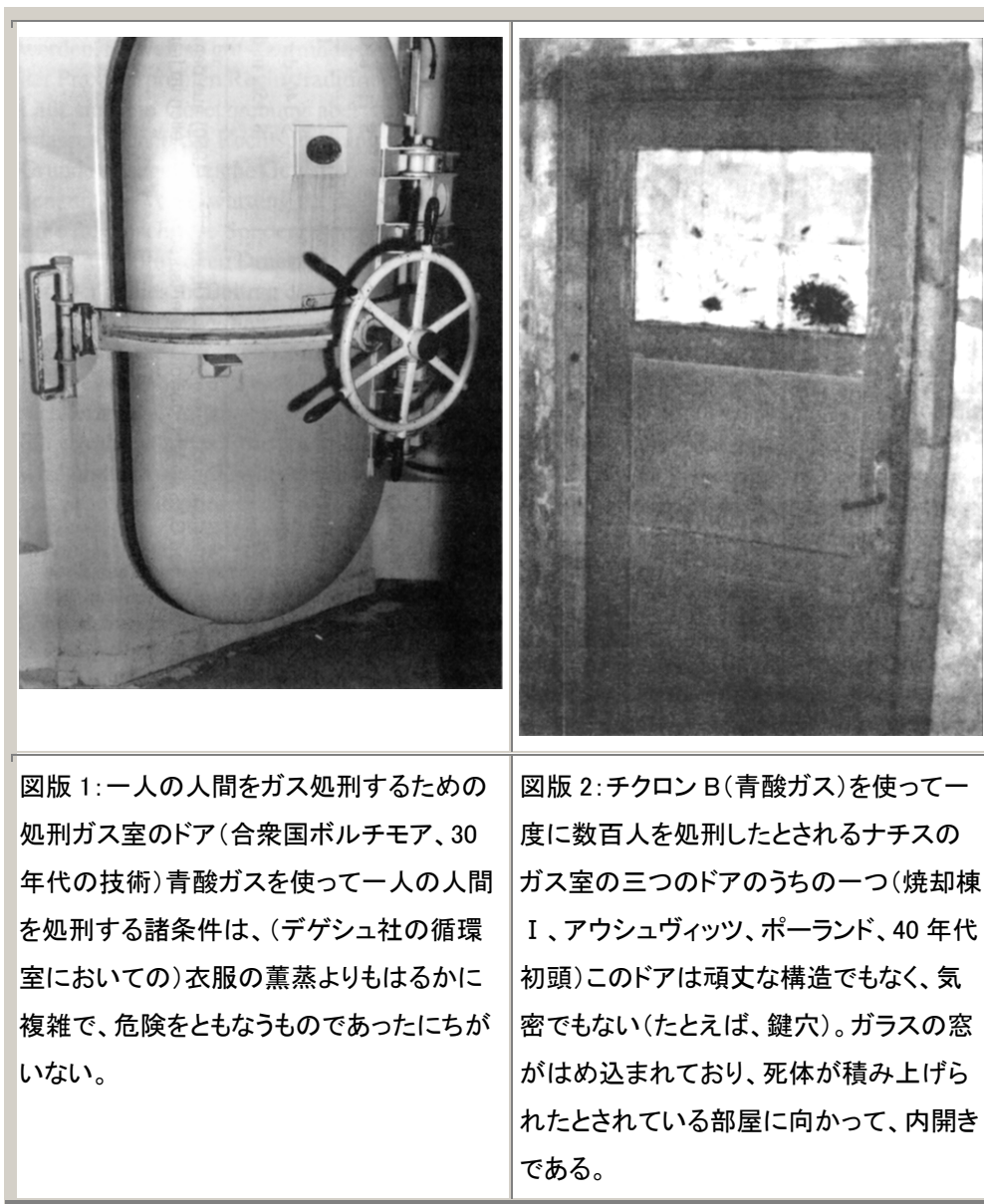
「ファシストはパルチザンに加わっていた彼を捕らえた(彼はピストルを携行していた)。彼は即座に射殺されないために、ユダヤ人であると称した。ユダヤ人であったために、彼はドイツ人に引き渡された。ドイツ人は彼をアウシュヴィッツに送った。」<sup>20</sup>

## 9. 結論

1945年から1985年まで、アウシュヴィッツのガス室についての裁判での証人はかなりの特権を享受していた。すなわち、彼らは、自分たちの証言した事実の物的性格についての反対尋問を受けることを免れていた。1985年、トロントでの最初のツンデル裁判で、弁護士ダグラス・クリスティは、私の指摘と助言を受け入れて、標準的な裁判手順にしたがって、こうした証人たちに反対尋問を行なった。この結果、証人アーノルド・フリードマンとルドルフ・ヴルバ博士の正体が明らかとなった。この事態はきわめて深刻であったので、今日では、アウシュヴィッツや第三帝国内の強制収容所での殺人ガス処刑を目撃したと宣誓の上で、証人席で証言する人物を見つけ出すことはできない。

メディアでの証人は、ラジオ、テレビ、書籍のうえで、検証を受けないまま増殖し続けている。メディアでは、辛らつな尋問を受けて困惑してしまうという危険を避けることができるからである。しかし、こうした証人でさえも、次第に曖昧となっており、絶滅論者

から非難されるような事態となっている。絶滅論者は修正主義派とはますます関係を持たなくなっている。今日まで、彼らのよってたつ基盤が、非常に多くの偽証者の嘘、自分たちの大義を揺るがしてしまうような嘘にもとづいていることを自覚しているからである。



1979 年のユダヤ人フィリップ・ミューラーがそうであったように、今日では、ガス室の

目撃者と自称することにはますます多くの危険をとまなうようになった。また、1983年4月26日のパリ控訴裁判所は、私がこれまでの証言と強力な物理的・化学的不可能性との矛盾を明らかにしたという意味で、私のガス室研究が誠実なものであることを認めた。このために、今日流行している解決は、1983年4月26日のパリ控訴裁判所裁定のあとの1983年5月7日に、シモーヌ・ヴェイユが採用しなくてはならなかった方法である。ヴェイユが採用した解決あるいは言い逃れとは、犯罪についての証拠、痕跡、証人が存在しないとしても、それは、ドイツ人がすべての証拠、痕跡、証人を消し去ったためであるというものであった。このような申し立ては、かなり馬鹿げたものであるが、そのように申し立てることによって、ヴェイユが提供していない証拠を必要とするであろう。しかし、それはどうでもよいことである。ヴェイユや彼女の説を支持する人々の申し立てに留意して、修正主義者がかなり以前から明るみに出してきた証拠を活用しよう。「ナチスのガス室」の証拠や痕跡だけではなく、証人もまったく存在しないのである。

今日、1993年末、アウシュヴィッツのガス室に関する証言は、絶滅論者のあいだでさえも信用を失っている。こうした証言にもとづいて書かれた歴史は、化学的性質を持つ事実と議論にもとづく歴史に道を譲りはじめている。この点については、1978年12月29日の『ル・モンド』紙の私の論文、1979年1月16日の『ル・モンド』紙への私の書簡のなかですでに指摘しておいた。私たちの論敵が、私が推奨した舞台に足を踏み入れるようになるには10年以上が必要であった。プレサックは、クラルスフェルト夫妻に指名されて、「証言史」を否定して、それを科学的土台にもとづく歴史、少なくとも科学的な外観をそなえた歴史と取り換えるという課題に取り組んだのである。

クロード・ランズマンと「証言史」の支持者は、敗北を喫し21、修正主義者はこの成果に一定の満足を感じた。根拠のない証言は半世紀間にわたって通用してきたが、いまや、法的、科学的、歴史的土台にもとづく事実と証拠の探求がそれにとってかわるようになったのである。

## 付録：エリー・ヴィーゼルのもっとも有名な著作のドイツ

### 語訳\*

French Original Version: <i>La Nuit</i> , éditions de Minuit, 1958, 178 p.	English Translation: <i>Night</i> , translated by Stella	German Translation: <i>Die Nacht zu            begraben</i> , Elisha,
--	--	--

	Rodway, Bantam Books, 1986 (25 <sup>th</sup> Anniversary Edition), pp. XIV-111	translated by Kurt Meyer-Clason, Ullstein**, 1962, pp. 17-153
<p><b>A. In Auschwitz</b></p> <p>1. p. 57: au crématoire</p> <p>2. p. 57: au crématoire</p> <p>3. p. 58: les fours crématoires</p> <p>4. p. 61: aux crématoires</p> <p>5. p. 62: le four crématoire</p> <p>6. p. 67: Au crématoire</p> <p>7. p. 67: le crématoire</p> <p>8. p. 84: exterminés</p> <p>9. p. 101: les fours crématoires</p> <p>10. p. 108: six crématoires</p> <p>11. p. 109: au crématoire</p> <p>12. p. 112: le crématoire</p> <p>13. p. 129: au crématoire</p> <p><b>B. In Buchenwald</b></p> <p>14. p. 163: du four crématoire</p>	<p><b>A. In Auschwitz</b></p> <p>p. 30: to the crematory</p> <p>p. 30: to the crematory</p> <p>p. 30: these crematories</p> <p>p. 33: in the crematories</p> <p>p. 33: the crematory oven</p> <p>p. 36: the crematory</p> <p>p. 36: the crematory</p> <p>p. 48: exterminated</p> <p>p. 59: the crematory ovens</p> <p>p. 64: six crematories</p> <p>p. 64: the crematory</p> <p>p. 66: the crematory</p> <p>p. 77: to the crematory</p> <p><b>B. In Buchenwald</b></p> <p>p. 99: of the crematory oven</p> <p>p. 106: to the crematory</p>	<p><b>A. In Auschwitz</b></p> <p>p. 53: in die Gaskammer</p> <p>p. 53: ins Vernichtungslager***</p> <p>p. 54: die Gaskammern</p> <p>p. 57: in den Gaskammern</p> <p>p. 57: die Gaskammer</p> <p>p. 62: die Gaskammer</p> <p>p. 62: Gaskammer</p> <p>p. 76: vergast</p> <p>p. 90: den Gaskammern</p> <p>p. 95: sechs Gaskammern</p> <p>p. 95: den Gaskammern</p> <p>p. 98: die Gaskammer</p> <p>p. 113: in die Gaskammer</p> <p><b>B. In Buchenwald</b></p> <p>p. 140: der Gaskammer</p> <p>p. 150: in die Gaskammer</p>



15. p. 174: au crématoire		
<p>* ユルゲン・グラーフの発見と Ms. A.W.の助力に感謝する</p> <p>** Ullstein, Thomas-Wimmer-Ring 11, D-80539 München; phone: (089) 235 00 80; fax: (089) 235 00 844.</p> <p>*** "Vernichtungslager" (絶滅収容所)とは「殺人ガス室を持った収容所」を意味する。</p>		
<p><b>結論:</b>フランス語版原本(1958年)の英語版(1960年)は正確であるが、ドイツ語版(1962年)は、フランス語原本には「ガス」がまったく登場していないところ 15 箇所、「ガス」という単語を使っている。この置き換え操作は組織的になされており、翻訳者は、ブッヘンヴァルト強制収容所で二つのガス室を発明してしまっている。</p>		

## 注

\* 本章は、フランス語原本から、Daniel D. Desjardins によって英訳された。

<sup>1</sup> E. Loftus, K. Ketcham, *Witness for defense*, St. Martin's Press, New York 1991、および本書のノイマイアー論文を参照(エルンスト・ガウスの注)

<sup>2</sup> シモーヌ・ヴェイユはヨーロッパ議会の前議長であり、結婚以前の姓はヤコブ。第二次大戦中は、アウシュヴィッツ強制収容所、とりわけボブツェク付属収容所に収容されていた。

<sup>3</sup> R. Faurisson, *Réponse à Pierre Vidal-Naquet*, La Vieille Taupe, Paris 1982; Engl.: "Response to a Paper Historian", *The Journal of Historical Review*, Spring 1986, pp. 21-72.

<sup>4</sup> "Handschriften von Mitgliedern des Sonderkommandos", in *Hefte von Auschwitz*, Sonderheft (I), Verlag Staatliches Auschwitz-Museum, Auschwitz 1972, pp. 32-71.

<sup>5</sup> ツィッペル博士による、証人チャールズ・ジギスムント・ベンデル博士に対する反対尋問については、"Excerpt from transcript of proceedings of a Military Court for the Trial of War Criminals held at the War Crimes Court, Curiohaus, Hamburg, on Saturday 2<sup>nd</sup> March, 1946, upon the trial of Bruno Tesch, Joachim Drosihn and Karl Weinbacher", transcript, pp. 30-31 (doc. NI-11953)を参照。この醜悪な裁判については、Dr. William Lindsey, "Zyklon B, Auschwitz, and the Trial of Bruno Tesch", *The Journal of Historical Review*, 4(3) (1983), pp. 261-303 (online: [vho.org/GB/Journals/JHR/4/3/Lindsey261-303.html](http://vho.org/GB/Journals/JHR/4/3/Lindsey261-303.html))が必読である。この論文の一部が Udo Walendy によって *Historische Tatsachen*, Nr. 25 (1985), pp. 10-23 に掲載されている。

<sup>6</sup> アイヒマンはイエルサレムでの裁判を待つあいだ、独房で、クリスマスの七面鳥のように養われた。彼はもはや、自分が聞いたこと、見たこと、読んだことを知ろうとしなかった。たとえば、以下は、イスラエルの政府委員が「ガス室」に関してアイヒマンに尋問した記録から直接抜粋した非常に重要な文章である。Transcripts, J1-MJ at 02-RM

「委員: アウシュヴィッツで絶滅されたユダヤ人の数についてヘスと話したことがありますか。  
アイヒマン: いいえ、まったくありません。彼は、新しい建物を建設したこと、毎日 1 万のユダヤ人を殺戮できることを話してくれました。そのような内容だったと思います。今、そのような想像しているにすぎないかどうかわかりませんが、想像しているのではないと思います。ヘスがいつどのように話してくれた

のか、話してくれた場所について正確に思い出すことはできません。そのことをどこかで読んだのかも  
しりません。彼から聞いたと読んだことを想像しているのかも知りません。それもありうることです。」

<sup>7</sup> この二つの図面の提示については、Hermann Langbein, *Der Auschwitz-Prozess, Eine Dokumentation*, 2 vol., Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt 1965, 1027 p., pp. 930-933 を参照。この裁判の権威ある研究は、Dr. Wilhelm Stäglich, *Der Auschwitz-Prozess, Legende oder Wirklichkeit? Eine kritische Bestandsaufnahme*, Grabert Verlag, Tübingen 1979, XII-492 pp (online: vho.org/D/dam)を参照。

<sup>8</sup> Queen versus Zündel, Toronto, Ontario, Canada, beginning January 7, 1985.

<sup>9</sup> Bantam Books, New York 1964.

<sup>10</sup> 1988年ウッペルタル(ドイツ)でのゴットフリード・ヴァイゼ裁判では、ガス室については言及もされていない。本書のヨルダン論文参照(エルンスト・ガウスの注)。

<sup>11</sup> Les Sept Couleurs, Paris 1962.

<sup>12</sup> 'Medico ad Auchwitz': Anatomia di un falso, Edizioni La Sfinge, Parma 1988.

<sup>13</sup> Beate Klarsfeld Foundation, New York 1989.

<sup>14</sup> R. Faurisson, "Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers, 1989, ou Bricolage et 'gazouillage' à Auschwitz et Birkenau selon Pressac" [... or, Pottering and Sputtering at Auschwitz and Birkenau According to J.-C. Pressac], *Revue d'histoire révisionniste*, November 1990, pp. 126-130 (online: www.lebensraum.org/french/rhr/pressac.pdf.); Engl.: "Auschwitz: Technique and Operation of the Gas Chambers or, Improvised Gas Chambers and Casual Gassings at Auschwitz and Birkenau According to J.-C. Pressac (1989)", *The Journal of Historical Review*, Part I, Spring 1991, pp. 25-66; Part II, Summer 1991, pp. 133-175.

<sup>15</sup> A Prominent False Witness: Elie Wiesel] *Annales d'histoire révisionniste*, Spring 1988, pp. 163-168; see also "Un grand faux témoin: Elie Wiesel (suite)" [A Prominent False Witness: Elie Wiesel (Continued)], *Nouvelle Vision*, September 1993, pp. 19-24.

<sup>16</sup> La Nuit, Preface by François Mauriac, Les Editions de Minuit, Paris 1958.

<sup>17</sup> 興味を引く点は、本書のドイツ語版(*Die Nacht zu begraben, Elisha*, with German translation by Kurt Meyer-Clason, Ullstein, Munich 1962, pp. 17-153)では、フランス語版の焼却炉がガス室に置き換えられていることである(ブッヘンヴァルトについても)。この発見については、スイスの修正主義者グラーフに負っている。また、ドイツ語版の翻訳者が、オリジナル版では使われていない「ガス」という単語を使うのを適切とみなした事例が15件あるが、このリストについては、フランス在住のドイツ人修正主義者A.W.に負っている(付録参照)。1986年12月、私は、エリー・ヴィーゼルのノーベル賞授賞式に出席するためにオスロにむかった。そして、友人の助けを借りて、「著名な偽証者:エリー・ヴィーゼル」という論文を配った。数カ月後、私の論敵の一人ヴィダル・ナケが、ヴィーゼル氏を次のような人物と非難した。「彼は、自分の頭に浮かんだつまらないことを話している。彼の話が正確ではなく、彼はシヨアの押し売りにすぎないことは、『夜』のなかの文章を読めばすぐにわかる。彼は、歴史的真理に対して、不正、大いなる不正をおかしている。」(Interview by Michel Folco, *Zéro*, April 1987, page 57).

<sup>18</sup> French: *Si c'est un homme* (If This Be A Man), Julliard Press, pocket edition, Paris 1993.

<sup>19</sup> La Vieille Taupe, Paris 1991, 127 pages.

<sup>20</sup> Ferdinando Camon, "Chimie/Levi, la mort" (Chemistry/Levi, death), *Libération*, April 13, 1987, page 29)

<sup>21</sup> とくに、Robert Redeker の論文を参照。彼は、「修正主義者の破局」との題で C. Lanzmann の雑誌 November 1993, pp. 1-6 に発表した。ここでは、修正主義は変化する時代の破局的兆候として描かれている。「アウシュヴィッツ」は、「神話」、すなわち宗教的な敬意の念をともなう信仰であったし、彼にとっては、今もそうであるというのである。しかし、彼は、「アウシュヴィッツ」が歴史的・技術的研究対象となりつつあることを嘆いている。この論文は、*L'Express* にプレサックの新著が肯定的に書評されていたときに(September 23, 1993, pp. 76-80, 82-87)、公表された。ランズマンは、「ホロコースト」史のこうした流れに強く抗議している。「修正主義者に反駁することが適切なこととするならば、われわれは修正主義者の議論を合法化してしまうことになる。修正主義者の議論が、本や著者を評価する唯一の基準となってしまう。修正主義者がすべてを取り仕切ってしまうことになる」と彼は記している(*Le Nouvel*

---

*Observateur*, September 30, 1993, page 97).